第1章　戦場

引揚げでの壮絶な体験　

私は父の仕事の関係で、家族で「満州」の吉林省というところにいいました。しかし、父は、
昭和十九年（一九四四）年に召集され、フィリピンのレイテ島での激戦で亡くなりました。

昭和三十年八月十五日、私が小学校一年生の夏休みのときに戦争が終わりました。日本は戦
争に負けてののです。そして、海外にいた日本人は皆、日本の国元に戻ることになりました。

昭和二十年（一九四五）に戻ったとき、飛行機で荷物を運んでいました。しかし、 Damn
の集団にたどりきました。途中、中国人やソ連人がおっそで、日本
人が乗せるようなもので
く、残飯を拾って、ストーブの上で焼いて食べ、馬のお化けであるコールマンも食べた。

秋になったら、よいよ食べ物がなく、中国人が作った畑の中に出っ
ている小さなお芋や、アカザという草を刈ってきて、それを大きな缶で
て、みんなで分け合い食べをしのい
でいました。しかし、そんなものではとても間に合わないので、冬に向かって、日本人みんな
でお団子のようなものや、たばこ紙に卷いて作って、それを中国の街に行って、並べて、み
んなで売りました。帰ってきたら、みんなでそのお金を出し合って、また次のものを買い

第一章
引揚げでの壮絶な体験

列車での移動の様子
舞鶴
京都府北部にあたる市。

子どもと子年寄りはほとんど亡くなってしまいました。
そして、翌年の春、日本に帰るという知らせが来ました。
みんな、やせ細りお猿さんのようになってしまいました。

船に乗ったときには結核食すべきでした。
しかし、みんなはここにここに元気になっていた。

私の方は私、ちょっと元気になったと思います。
 войныは、人が毎日亡くなっていくことが当たり前のようでした。そして、人が亡くななるというのに、泣くこともなく、ただ無気力にじっと見てているだけです。今思い出すと、恐ろしいような、本当にあったのかと思うような体験をしました。
第一章

私が手伝いに来ていた中国人は、とても優しくて、いい人たちでした。しかし、日本人に支配されたときにありましたので、その考えが逆転してしまって泣いてきたことがあります。それでも、中には、街角で母がものを売っているときに、「帰ったら子どもに食べさせない」と言っていたのです。

母は、日本に帰って来てから数年後、弟二人が亡くなったときは悲しかったけれども、これからの人になるなら、お仕事の関係の人や、周りの人たちとも仲よく暮らすことを思っています。そうして、世界じゅうの人たちとも仲よく暮らすことができます。これが大分ではないかと思います。それならば、みんなでできると思うのです。それが大切ではないかと思います。つまり、仲よく、相手のことを思うことが大切です。これが戦争やけんかが起きない一番の要因だと思いますし、平和に暮らせる前点であると思います。

DATA
平成23年度南区平和事業
聞き取り
・ 平成23年8月2日
・ 藤野児童会館

石井美智子（いしい・みちこ）さん
・ 昭和13（1938）年生まれ
・ 札幌市南区在住